

台湾における小学校英語教育

—都市部, 地方都市, 離島における授業観察から—

建内高昭

Takaaki TAKEUCHI

外国語教育講座

はじめに

本稿では台湾での小学校英語教育事情を教育部（日本における文部科学省に相当する）発表の資料だけでなく、教室現場を踏まえて見ていく。台湾において小学校英語教育が始まり、授業を始めとして概ね順調に進められ成果も上がったかのように公式な結果報告に論じられていることが多い（例えば台北県教育局2003）。その背景に都市部及び特定の地域は、先行して小学校英語教育を開始してきている。その結果、たしかに2001年より小学5年、さらに2005年度より小学校3年から全県にわたり小学校で行われることになった。だが、こうした一律の短期間での英語科目導入そのものは、その導入期間の短さから生じる様々な教育現場の問題まで十分に目配りがおこなわれているとはいえない。英語教育の教室現場を通じて、台湾国内の複数の地域から考察することは、今後日本において小学校英語の導入が見込まれる上からも必要であると思われる。また、小学校英語教育が国民小学（以下小学校と表記する）現場に持ち込まれたことが就学以前の子どもたちにどのような影響を与えているかを検討することも欠かせない。それは、台湾国内の異なる地域における教育現場でなされる小学校英語教育の比較によって検証が可能であろう。本稿は対象地域に都市部として台北県及び台北市、地方都市として台東市、離島として蘭嶼島を選定した。

これまで、台湾の早期英語教育における考察は、台湾国内での研究（Chang, 2005；陳&許, 2005）により考察が進み始めている。またアジアにおける小学校英語を検討した文部科学省中央教育審議会第9回資料（2005）は、台湾における最新の英語教育事情を分かりやすく報告している。これらの研究からは、台湾における早期英語教育の目的や九年一貫課程の中に位置づけられた英語必修化を知ることができるが、教室現場の実践に見られる現状や特徴までは考察されていない。

そこで本稿では、台湾で小学校英語教育がどのように導入されたかを整理したうえで、以下のことを検討する。第1に、台湾で行なわれている英語授業が目的に対してどのように行われているかを明らかにし、第2に、教育現場の校長たちは英語教育をどのように捉

えているかその特徴を明らかにする。第1の課題に対しては、英語綱要及び教室現場視察を踏まえ検討する。第2の課題に対しては、現地調査における聞き取りや学校訪問、また校長からの意見も踏まえて検討する。なお台湾の小学校には2006年2月～3月の間、11校の小学校にて調査を行なった。

1. 小学校における英語教育の位置づけ

台湾における小学校英語教育開始2001年度の前年である2000年に「國民中小學九年一貫課程暫定綱要」が制定された。これは小・中学校における全教科のカリキュラムを合わせ系統立てたものである。この「九年一貫課程」の中で、初めて5年生より英語必修化が位置づけられた。また「九年一貫課程暫定綱要」の「暫定」版は、2003年度に「正式」版に変更されている。その後「正式」版は2005年度より実施となり、新たに小学校3年生からの英語必修化が位置づけられた。

1. 1. 小学校英語教育の導入

台湾の小学校では、2001年度より小学校5年以上に対して、英語授業が必修科目として始まっている。2005年より、小学校3年以上に対して英語授業が必修科目として置かれている。小学及び中学校に対して「九年一貫課程綱要」の中で、「英語教学遂規劃九十四学年度起提前至國小三年級開始實施」と定められ、2005年9月より開始されている。

台湾での小学校英語は全ての地域で2005年度より小学校3年（2001年度より小学5年）正式開始ではあるが、各県及び市によってはそれより以前に英語授業が開始されている。例えば台北市では1998年より小学校3年より開始され、以降毎年1学年ずつ引き下げられ2000年より小学校1年生で始められている。また各学年の英語授業の時間数は同一地域内であっても各学校の判断により異なるなど弾力的に扱われている。

1. 2. 小学校英語教育の内容と目的

英語の目標は3つ挙げられている。第1は英語の基本的英語コミュニケーション能力を養う〔原語：培養學生基本的英語溝通能力〕。第2は児童に英語への興味を喚起し学習の仕方を身に付けさせる〔原語：培養學生學習英語的興趣與方法〕。第3は児童に自国の文

化と異文化との違いを認識させ理解を深める〔原語：増進學生對本國與外國文化習俗之認識〕（英語綱要，2004）。これらの目標から読み取れるのは英語コミュニケーションに実際に触れる中で、母語とは違う新たな英語という言葉への興味を促す。さらには言葉を使うことで、あるいは言葉に含まれる文化的な要素の違いを認識することで自国とは違う異文化に気づく、あるいは理解するきっかけを与えるという趣旨であろう。ここで示された基本的な理念は、たとえば日本の中学校学習指導要領外国語の目標（1998：90）「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」とほぼ同一内容といえよう。日本における中学校外国語指導要領の目標（中学1年～3年）と台湾における英語綱要：語文学習領域（小学3年から中学3年を対象）はほぼ同じ目標ということになる。日本において3年間で目指す目標と台湾における6年間（小学3年から中学3年）で目指す目標がほぼ同じであるとすれば、台湾における小学校英語教育の授業実践にはどのような特徴が見られるのだろうか。

2. 英語綱要に関して

2.1. 指導方法

指導方法について英語綱要（2004）によれば小学校において身に付けるべき語（oral）300語、小学校修了時まで身に付けるべき語（writing）180語としている。英語学習領域能力指標は、4領域：リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングを取り扱っている。ここでは4領域の中からリスニング項目を取り上げ表1に示す。リスニング指導の特徴は、英語コミュニケーション活動の一環として示されていることである。具体的には、音声によるアルファベットの習得を前提にして、教室用語や日常語彙を聞き分けられるようになることである。これらの導入に伴い、教室内的での英語による授業展開を意図しているものと思われる。また教師からの質問に対してyes/noで答えることのみならず、いつ・どこで・何を・なぜという疑問文が導入できることになる。これはまさに英語での日常会話に対応できるリスニング指導のあり方をねらったものであろう。

2.2. リスニング指導

このリスニング指導項目をさらに市レベルで具現化したものの1つとして台北市の『國民小学各年級英語学習能力指標』（2005）がある。低学年では30語、中学年では110語、高学年では161語と学年段階に応じた指導項目を定めている。さらにクラスルーム英語として低学年では20文、中学年では21文、高学年では40文

をTPR（全身教授法：Total Physical Response）を利用するように示している。

表1の「英語綱要」は提示された順番通りに指導されているわけではない。例えば台北市は市独自の学年別指導項目を設定している（台北市國民小学各年級英語学習能力指標，2005）。リスニング領域についての特徴についてみると、1年時では、「1-1-1：26のアルファベットの音を聞き分けることができる」、2年時では「1-1-3：授業で習った用語を聞き分けることができる；1-1-4：疑問文と平常文の語調を聞き分けることができる；1-1-8：簡単な文を聞いて理解できる；1-1-9：簡単な日常生活の会話を聞いて理解できる；1-1-10：簡単な歌や詩の主な内容を聞いて理解できる」。3年時では「1-1-2：英語の音を聞き分けることができる；1-1-5：基本的な単語、熟語、文のストレスを聞き分けることができる」。4年時「1-1-3：授業で習った用語を聞き分けることができる；1-1-6：簡単な文のリズムを聞き分けることができる；1-1-11：本、操り人形、ジェスチャー等の視覚的な補助教材を用い、簡単な児童向けの物語や短い劇のおおその内容を聞いて理解できる」。5年時では、「1-1-5：基本的な単語、熟語、文のストレスを聞き分けることができる」。そして6年時には、すでに「英語綱要」のリスニング領域で示されたものは全て終えてしまい、「語彙を300語以上聞いて理解できること、及び基本表現81文を聞いて理解できること」と示されている。このように台北市学習能力指標のリスニング領域では5年生までに小学校で学ぶ段階内容を終え、6年生ではより高度なレベルを設定している。本来6年生で終わる目標が1年前倒しで進む理由のひとつとして台北市では小学校1年より英語必修化していることが挙げられる。

2.3. リスニングの評価

授業評価に関わり、英語綱要（2004）は多様な観点から捉え授業内の児童の英語活動、学習態度、英語表現、英語のリスニングやスピーキング、授業内のコミュニケーション活動、簡単な役割練習、グループ活動を取り入れ、筆記試験をなるべく少なく抑えるようにと示している。2001年度当初の指導評価との違いは、筆記試験を「用いない」から「少なく抑える」というように利用を全面否定はしていないことである。つまり英語綱要（2004）での英語への興味づけという目標は同じであるが、筆記試験による評価を容認する姿勢を打ち出したことになる。もともと小学校英語における理念として示したものは、英語に対する興味付けを高めながら楽しく学ぶという趣旨である。しかし各県や市、学校ごとに筆記試験による評価が試験的に導入されつつあり、例えば台北市、台北県では小学4年と6年生に対して筆記試験を含めた英語試験を各校単位

表1. 「英語綱要」(2004) に示されたリスニング領域について

1. 聞く (リスニング) 「*」印のある能力指標については、各学校が児童・生徒の能力や授業時数や教育課程に応じて、到達度の程度を調節したり、内容や別教材を利用して適切に教育を行っても良い。文部科学省 (2005) 中央教育審議会 外国語専門部会 (第9回) 「台湾における小学校英語教育の現状と課題」8頁「リスニング」を参照し、新たに各項目の細目事項を付加した。

国民小 学段階	<p>1-1-1: 26のアルファベットの音を聞き分けることができる。</p> <p>1-1-2: 英語の音を聞き分けることができる。</p> <p>一. 語頭と語尾の子音が聞き分けられること (例: pat, cook)。</p> <p>二. 母音が聞き分けられること (例: at, cow, sit)。</p> <p>1-1-3: 授業で習った用語を聞き分けることができる。</p> <p>一. 授業中に学んだ語彙の聞き取りができること。</p> <p>二. 授業中に学んだ語彙を聞いてその意味を理解できること。</p> <p>三. 授業中に学んだ語彙に近い発音の語彙を聞き分けること。</p> <p>1-1-4: 疑問文と平常文の語調を聞き分けることができる。</p> <p>一. 平叙文のイントネーションの語尾が下がるのを聞き分けること。</p> <p>二. yes/no question の語尾のイントネーションが上がるのを聞き分けること。</p> <p>三. wh-question のイントネーションの語尾が下がるのを聞き分けることができること。</p> <p>1-1-5: 基本的な単語、熟語、文のストレスを聞き分けることができる。</p> <p>一. 単語内の音節とアクセントを聞き分けることができる。</p> <p>二. 句と文節とのアクセントを聞き分けることができる。</p> <p>1-1-6: 簡単な文のリズムを聞き分けることができる。</p> <p>一. ひとつの文の中にある単語と、節の中にあるストレスを聞き分けることができる。</p> <p>二. ひとつの文の中にある単語と、節の中にあるプロソディを聞き分けることができる。</p> <p>1-1-7: 常用の教室用語や日常生活用語を聞いて理解できる。</p> <p>一. 自分の英語名を聞いて分かる、そして他人の英語名も聞いて分かる。</p> <p>二. 授業中、先生が頻繁に使う表現を聞いて分かる。</p> <p>三. 生活に使う用語を聞いて分かる (例: Hi! Thank you. I'm sorry. That's OK. Good-bye など)。</p> <p>1-1-8: 簡単な文を聞いて理解できる。</p> <p>学習した重要表現を聞いて分かる (疑問詞のある疑問文)。</p> <p>1-1-9: 簡単な日常生活の会話を聞いて理解できる。</p> <p>一. 日常会話のキーワードを聞き分けることができる。</p> <p>二. 簡単な文で構成された会話を聞き分けることができる。</p> <p>* 1-1-10: 簡単な歌や詩の主な内容を聞いて理解できる。</p> <p>一. 簡単な詩や歌詞の中のキーワードを聞いて理解できる。</p> <p>二. 簡単な詩や歌詞のキーセンテンスを聞いて理解できる。</p> <p>* 1-1-11: 本、操り人形、ジェスチャー等の視覚的な補助教材を用い、簡単な児童向けの物語や短い劇のおおよその内容を聞いて理解できる。</p> <p>一. 本や操り人形等の視覚的な補助教材を用い、簡単な児童向けの物語の中のキーワード、キーセンテンスを聞いておおよその意味が分かる。</p> <p>二. 人の表情やジェスチャーを通じて、児童向けの劇のキーワードやキーセンテンスを把握し、そのおおよその意味を理解できる。</p>
------------	---

で実施してきている。このように英語教科の理念と教室現場での動きとは目指すベクトルがずれ始めている。この筆記試験導入に関して教育部側は、12歳以下の児童の英語力の測定を行なわないと示してきた。しかし一方では政策の結果を示す説明責任が生じるというのが一般的な見解である。その意味では英語授業における筆記試験の導入そのものに対する疑問 (陳&許, 2005) も指摘されている。

そのような中で一例として台北県の小学6年対象の「台北県國小英語基本能力検測: リスニング問題」2005年4月7日実施テストを以下に示す。Q 1-4は、リスニング音声を聞き、絵を選択する問題、Q 5-8は、単語を聞き、書き取る問題である。Q 9-12は、適切な表現の組み合わせを選ぶ問題である。そしてQ13-

15は、リスニング音声から適切な場面想起ができるかどうかを問うものである。

このリスニング試験は、英語の基本単語が書けること及び英語を音声のまま聞き取れることを中心に問うている。また、会話表現に適した文を選ぶなど表現の使い方も質問項目に含まれている。この試験の内容は英語綱要で示された目標の範囲内に収まっている。

2. 4. 共通テスト (筆記試験) の是非

仮に筆記試験による評価を公式な共通テストとして行なうようになれば、各学校での児童の英語力が同一基準にて測定可能となる。このような評価が仮に行なわれるとするならば英語綱要の理念として掲げた「基本的コミュニケーション能力を養う」姿勢から筆記試

問 題	テスト項目・内容
Q 1-4	いくつかの絵を見て選ぶ。 1. man 2. monkey 3. girl 4. student
Q 5-8	書き取り (dictation) 5. pen 6. can 7. wheat 8. time
Q 9-12	絵を与えられ、最も適切な会話を3選択肢から選びなさい。絵が示されている。 例) What day is today? It's Sunday. What do you want for breakfast? I want some milk. How's the weather? It's sunny. 9. Good night. a) Good morning. b) See you. c) How's weather? 10. What do you like to play baseball, Tom? a) Do you like to play baseball, Tom? Yes, I do. b) Do you like apples? Yes, I do. c) Do you like to play, Tom? No, I don't. 11. Thank you. a) I am hungry. b) You are welcome. c) He is a boy. 12. Nice to meet you. a) What's your name? b) I am ten years old. c) Nice to meet you, too.
Q 13-15	場面・絵を見て、適切なものを選ぶ。2回ずつ流れる。この表現に適切な絵を選びなさい。 13. Is it a bus? No, it's a car. 14. What would you like? I'd like some cake, please. 15. Happy Halloween. Happy Halloween. 16. He goes to school in the morning.

験を含むテストを意識した授業へと変わっていくことも十分考えられる。現段階では使用教科書会社13社のうち2社の採択率が高い状況である (Chang, 2005)。今回視察した小学校では採択率の高い2社のうちの1つである康軒文教事業の *Wow English, Coco & Momo Learning English* の2冊が使用されていた。同一会社であるが教科書内容の難易度には違いが見られ *Wow English* は扱っている語彙数も英文の量も多いのに対し、*Coco & Momo Learning English* は語彙も少なく、英文の長さも短い易しいテキストであった。

仮に共通テストが広く実施される方向が打ち出されれば、現在の英語開始学年の違い、教科書採択のあり方、指導内容等に関わり地域ごとに英語教員がコンセンサスを持つ必要が生まれてくるだろう。聶 (2005) は、小学校においても中学・高校で行われている文法重視の従来の授業形式に移行する可能性があると呼びかけている。

3. 授業における考察

ここでは各小学校における授業の考察を行う。対象地域は、都市部として台北県及び台北市、地方都市として台東県及び台東市、そして離島として蘭嶼島を選定した。それらの授業を英語授業としてどのように扱われているかを5つの観点から考察することにした。

1) 学校の場所、学年・人数

各学校の所在地及び、英語授業開始学年、及びクラスサイズを示した。

2) 座席形式・焦点となる文

授業クラスをホームルームクラスで行なう場合や、

特別 (弾性) 教室を英語授業の教室として使っている場合が多く見られた。ただ座席形式は同一学校であっても教師により違いが見られた。また英語授業における目標・焦点となる文及び形式を明らかにした。

3) 授業での導入・展開

授業での導入・展開がどのように行われているかを明確にすることで、授業の全体像が浮かび上がると考えた。

4) 教師と児童・児童と児童のインターアクション

英語科目の目標にも掲げられているのはコミュニケーション重視である。すなわち教師と児童、さらには児童と児童のインターアクションをどのように置いているかに着眼した。

5) 教室英語の割合・授業での特徴等

英語授業という観点から、教室英語の割合を調査した。さらに英語授業における工夫内容及び特徴を列挙した。

表2に見られるようにクラスサイズは最大35名である。ここに示された台東県D小学校は市街地の学校であり児童数も少ない学校であった。また蘭嶼島には小学校が4校あり、すべて小規模校である。G小学校では総児童数52人、H小学校は総児童数79人、G及びH小学校の各学年は1クラスのみである。

座席形式は、児童同士の対面式に座るグループ(班)形式か、一人ずつ黒板に向かう個別形式に大別される。教師と児童及び児童と児童のインターアクションが活発に行なわれていたのは、対面式によるグループ(班)形式であった。児童同士が顔を合わせることで、教師対児童、児童対児童、グループ対グループという

表2. 授業における考察

学校の場所 学年・人数	座席形式・焦点となる文	授業での導入・展開	教師と児童・児童と児童の インターアクション	教室英語の割合・授業での 特徴等
台北県A小学校 α先生4年・35名	2人組 Do you feel hungry? Yes, I do. / No, I don't.	ABCの歌・hungryという 状態をジェスチャーを使 い導入。	ABCの歌を振り付けを用 い元気よく歌う。ボールを 媒介にして回答者・質問者 へとりレー・児童同士の活 動では対応しきれていない	90%・マイク利用・開始前 に黒板にセンテンス文、絵 など既に掲示済み。列及び 班ごとの評価表利用
台北県A小学校 β先生3年・35名	6人グループ3対3の対 面座席 Are you Lisa? Yes, I am. / No, I am not.	復習から始まり、 I am Andy. Are you Jane? と導入・ picture card を有効利用	規律が保たれている。児童 による活動でもクラス全員 が集中して聞いている	60%・3年生対象であり中 国語による説明も多い・班 ごとに評価表利用
台北市B小学校 3年・30名	6人グループ3対3の対 面座席 What is this? It is a book.	Touch your mouth, eyes, feet etc (monkey game) により活動的な導入	児童の発話を促し、教師が 促進者の役割を行なう。 TPR 教授法が有効かつ効 果的	100%・教材はpearson社 のものを利用。フォニック スを用いて英語の歌導入
台北市C小学校 5年・32名	1人席1列ごと・ Do you play tennis? Yes, I like to play tennis.	パワーポイントを利用し た授業・スクリーン画面 を黒板として利用	インターアクション欠如・ 児童は新出単語と基本文の み発話	60%・パワーポイントファ イルで教材をすべて提示・ ネット上の教材利用
台東県D小学校 5年・21名 台東県周辺部	2人席3列黒板に対して 前向・2コマ連続授業・ 代理教師 How old are you? I am 11. Are you 10 years old? Yes. / No.	数字の復習から始まり、 年齢を問う形式・生徒の 実態に応じた授業展開に なっていない	児童と先生のやり取りを行 なうが児童は受身的態度・ 英語の歌を歌う場面では声 がでていない。	20%・児童の興味を引く工 夫が少ない・時間配分不適 切。40分中15分もワーク ブックを行なう
台東県E小学校 5年・21名 台東市中心部	4人グループ2対2対面 座席 What time is it? It's 7 o'clock.	歌による導入・歌のなか に時間を表す項目を利用	積極的に歌を歌う・教科書 復唱も積極的に発話・統制 のとれた授業展開	80%・チャンツを上手に利 用・新出単語導入にも既知 の単語を利用する
台東県F小学校 6年・35名 台東市中心部	5名横一列の長机・黒板 に向かって前向き	単語テストに15分使い答 え合わせを行う	児童に主体性は見られるが 教師の一方的な授業形式・ 児童の発話はテキスト復唱 のみ	30%・コミュニケーション 活動が極度の不足した授業 展開
台東県離島G小学校 6年・7名	1人席×7 How's the weather? It's rainy.	新出単語導入を行うが、 コミュニケーションに結 びつける工夫が不足	児童7名なのに発話は単語 復唱にとどまる・教師の一 方的な授業展開	5%・児童の英語力が低 い・コミュニケーション活 動につながる展開が不足
台東県離島H小学校 5年・16名	4人グループ2対2対面 座席 Are you a student? Yes, I am. / No, I am not.	one ~ fifteen を数えるが 理解できない児童複数い る・チャンツやCD利用 しながら導入	新出単語の復唱を行なう。 児童は英語苦手意識強いコ ミュニケーション活動につ ながらない	10%・実物(聴診器・注射 器)から doctor, nurse を 導入・教師の英語発音改善の 余地あり
台北市I託児所 (私立) 5歳児・22名	床の上、椅子無し、自由 に立つ座る活動可能 How much money do you have? I have \$20.	踊りながら歌導入・ one ~ fifty まで全員数え ることができる	主体的かつ能動的な活動・ 40分を10分ごとのチャンク に区切り幼児が飽きない工 夫をしている	95%・教師が踊り歌いモデ ルとなり英語を導入。風船 を媒介にして数字を全員で 数える・幼児の実態を把握 し活動を行っている

3層にわたる学びの場が形成されていた。たとえばグループを核に授業展開することで、児童たちの英語に対する活動が活発になり、能動的かつ自発的に取り組んでいた。なかでもグループ活動を活性化させるためにグループ間の競争原理を取り入れ、グループ別得点表を黒板に掲げ、活気付ける工夫も見られた(台北県A小)。一方で個別座席では英語による一方的な講義

形式の授業展開となる傾向が強く、英語コミュニケーション活動は限定的であった。たとえば5人1列の長机での座席では筆記重視の授業展開(台東県F小)になっていた。また教室に関して、都市部の大規模校ほど英語専用の特別教室を用意している場合が多く、地方都市や離島など小規模校ほどホームルーム教室を利用していた。具体的に各学校の状況を列挙してみよう。

特別教室を利用して4人あるいは6人の対面式グループの座席配置を行っていた(台北県A小, 台東県E小), それに対して1人ずつ列ごと(台北市C小)などの違いが見られた。またホームルーム教室を利用した4人や6人のグループ座席(台北市B小, 離島H小), 一方1人ずつ列ごとの座席(離島G小), 2人ずつ(台東県D小)長机に5人ずつ横一列(台東県F小)であった。

焦点となる文は, 教科書のユニットで示されたキーセンテンスを主として扱っていた。焦点となる文の扱いから, 授業内容・項目の進度の差が見られる。一例として台北県A小学校3年生と離島H小学校5年生は, “Are you ~ ?” という同一の文型を扱っている。これは, 都市部の小学3年生で扱う文型が, 離島の小学校では5年生の内容に相当していることを示している。

授業の導入について考察すると, 児童が歌を歌いながら体も一緒に動かす, あるいは先生の英語の指示に合わせて動作を行なう全身教授法(Total Physical Response)が多く用いられていた。この手法はどの学校においても広く取り入れられていた。

教師と児童のインターアクションは, 既に指摘したように対面式グループ型式の座席ほど活発であった。また教師自らの英語力が高く, 発話モデルとして生き生きと演じているクラスほど, 児童及び児童同士のインターアクションが活発であった(台北県A小, 台北市B小, 台東県E小)。一方で英語の基礎事項が定着していない児童を多く抱えるクラスでは, 教師のモデル発話を表面的に真似る活動が中心であった(台東県D小, 離島G小)。

英語教師の教室英語の割合は, 先生の英語力に大きく依存して, 都市部ほど英語授業による展開が活発に行われていることが伺える。これは学年ごとにより児童の理解できる語彙量にも違いが見られた。例えば台北市B小学校英語教師のTOEFL(630点取得)など高度な英語力を持ち, 日ごろから英語での授業展開をしているクラスでは教師がすべて英語で授業を行い, 児童も十分に理解していた。一方離島・地方都市周辺部小学校では, ほとんど中国語で授業展開するクラスが見られた。そのようなクラスでは単調な音声項目の反復であったり, 単語の繰り返しであったり, 児童の興味関心をひきつけるに至らない様子も見られた。

4. 校長先生からの聴き取り調査

4.1. 校長先生に求められること

各小学校では校長の持つ裁量権の下で, カリキュラムの弾力的な運用が行なわれている。例えば同一市内においての英語授業開始学年は定められているが, 3年生で週1時間の場合や週2時間の場合などである。とりわけ同一地域内の近くに2つの小学校がある場

合, 保護者側に学校選択の自由が認められているため, 児童確保の観点から学校ごとの創意工夫が求められていた。1つ目の学校は伝統ある小学校であり設備も揃うなかで, 英語教師が授業以外にスローラーナーに対して補習を行っていた。2つ目の学校では, 赴任したばかりの若い英語教師が最新設備であるPC, プロジェクターを導入しながらスクリーンを黒板に見立てて授業を行っていた。あるいは今回視察した地方都市部のある小学校では, 近辺には塾もなく学校外における英語学習の機会が皆無であり, さらに児童の英語学習への意識も低く十分でないため校長自らの発案で, 6年生全員を対象に毎週1回基礎基本を習得させるために補習を行っていた。あるいは, 児童に馴染みのあるCMや挨拶文を毎日通る廊下や階段等に貼り付けるなどして, 英語学習を喚起するような取り組みも多数の学校で見られた。

4.2. 校長先生からみた小学校英語の現状

本研究では, 6校の校長(都市部2校, 地方都市3校, 離島1校)から直接聞き取り調査を行い, 各小学校で行なわれている英語教育の現状を把握することにした。聞き取り項目として, 大きく5つの項目に絞った。

1) 英語授業開始学年及び授業時間数

小学校3年生から一斉に開始されているが, 地域によっても開始学年が異なることがある。また同一学年で開始しても各学校により授業時間数の違いが見られる。

2) 英語授業の現状認識

現在行なわれている各学校の取り組みに対する校長自身の見解を聞いた。2005年度より全ての小学校3年生より開始されている。

3) 評価のあり方

現在は, 指導評価に対しては授業内における児童の活動に対して行うものとされている。ただし一部の地域においては, 筆記試験が導入されている。

4) 危惧すること

各学校によって, 英語教育のおかれた状況は異なっている。たとえば学校における英語授業開始学年が同じ場合でも, 選択する教科書の相違による難易度の違いが見られる。あるいは, 学校外の塾の利用割合など地域による違いも見られる。

5) 今後の抱負

各学校の現状から, 今後の英語教育の方針及び展開について, どのようなことを考えているかを聞いた。

授業開始学年は, 表3に示すように台北市は1年生から週2時間を1年生から6年生まで合計12(2×6年)時間数となるのに対し, 多くの地域では3・4年で週1時間及び5・6年で週1時間なので合計6(1×2+2×2)時間数であった。単純に比較すると,

表3. 校長の見解 英語授業に対して

学校所在地 開始学年・時間数	英語教科の現状認識	評価のあり方について	危惧すること	今後の抱負
台北市O小学校 3年・週2時間	英語は週2時間で十分1年生から導入は反対3年生より開始が適切。	台北市統一で4年と6年でリスニングを含む筆記試験実施。	週2時間を越えて行なう必要はないと考える。母語習得のための時間数減少及び母語への負の影響がある。	英語圏へのホームステイ海外への交流機会を設定したい。英語スピーチコンテスト、単語・作文コンテストの企画。
台北市P小学校 1年・週2時間	英語は週2時間で十分・台北市教育部の到達度目標は高すぎる。楽しい英語授業が理想だと考える・他の教科の時間数とのバランスを考慮する必要あり。	クラス内での児童の学力差が存在している。授業でどのレベルに合わせて授業展開するかが困難。	小学校においても既に学力に2極化が見られる。中学に見られる2極化が早まること。	小学校では楽しく、中学校では文法重視という教え方にズレが見られる。これは英語に限った問題はないができるだけ連携する必要があると考える。
台東県Q小学校 3・4年週1時間、 5・6年週2時間 台東県周辺部	児童の興味関心を引くことから、より英語への興味を付けさせたい。	英語授業は行っているがほとんど効果が上がっていない。	小学校で英語嫌いをつくってしまっていること各家庭の経済的格差により、幼稚園から英語を始めるなど差が生まれる。	教科書内容が難しいので、せめて基礎基本だけでも定着を図りたい。
台東県R小学校 3・4年週1時間、 5・6年週2時間 台東市内中心部	小学校での英語教育そのものに疑問を感じている。やや多い時間数だと考える。	英語への興味付けこそが大切・筆記試験による評価には反対である。	中学側から、小学校のうちに基本単語や基本文を憶えさせるように要請され、困っている。 小学校英語の本来の趣旨を明確に示してほしい。	英語を使う環境整備が大切。
台東県S小学校 3・4年週1時間、 5・6年週2時間 台東市内中心部	英語科目導入は失敗である。理由①代理教師の人数が多すぎる ②原住民はあまり教育に対して熱心でない。	評価が定まるにはまだ時間がかかると考える。	小学校から中学校への連絡が不十分。	英語教科開始による効果が見えてこない。
台東県離島T小学校	効果はほとんど上がっていない。児童の興味関心はとても低い。	コミュニケーション活動だけにしたい。	筆記試験ではますます都市部の小学校と差ができてしまう。	何とか基礎・基本だけは習得させたい。

台北市では、他地域の2倍の授業時間を確保している。公教育における小学校英語授業時間数の比率は2：1という不均衡になっている。

英語教科の現状認識においては、楽しい英語授業を行うというコンセンサスは見られる。ただし、都市部及び地方都市中心部の校長先生たちは、英語授業での一定の成果が上がっていると考えているが、これ以上到達目標を押し上げることには慎重な姿勢を示している。一方で都市部周辺部及び離島の校長先生たちは、あまり英語授業の成果が上がっていないことへの不安を挙げている。

評価は、授業内の活動を中心に進められている。ただし都市部では、共通の筆記試験が徐々に実施され始めており、このような現状を支持する校長先生もいれば、やや到達目標が高いと感じる校長先生もいた。一方地方都市周辺部、離島では現在の授業内の児童の活動を評価することで十分である考え、筆記試験の導入には批判的であった。

英語教育に対しての危惧として都市部の校長先生たちは、クラス内における児童の英語力の2極化、塾に通う児童とそうでない児童との差、就学以前の英語教育の影響など都市部に起きている問題を指摘している。一方地方都市周辺部、離島の校長先生たちは、小学校において「英語嫌い」を生むことや都市部との学力格差拡大を問題点として指摘していた。

今後の抱負では、小学校英語と中学校英語との連携について、どのように具体的に近づけていくのかを問題視する声が多く挙がっていた。この問題は大きく2つに分かれており、都市部では現在の英語授業の成果をより充実した小中連携に結びつけようという姿勢である。もう一方は、地方都市周辺部、離島において基礎・基本を最低限身につけさせることができず、せめて中学に上がる前までに基本事項の徹底を図りたいという姿勢である。

まとめ

台湾の小学校に一律に導入された小学校英語であるが、都市部、地方都市、離島とさまざまな英語授業を見る中で、同一学年であっても授業内容及び授業展開が大きく異なっていた。あるいは教師と児童及び児童と児童のインターアクション、教室英語の割合は、授業者の力量及び英語力により大きく異なっていた。早期英語教育が一律に行われていても、各学校における児童の英語力、授業者の児童を把握する力及び英語力は一様でなく、その問題は地域により大きく異なっていた。今後は、このような現実に向き合いながら、英語授業の質の確保、児童の英語学力の把握ということが問われていくことであろう。

校長先生は各学校の実態をよく把握しており、英語必修化に伴った英語教師の配置や教科書選定などある程度明確な方針が立ち現場に定着しているを見ていた。その意味ではもう新しい科目という認識ではなくなっていた。その代わりに、3年生から6年生の英語教科と他の必修・選択科目のバランスや、学年ごとの発達課題に応じた言語指導（中国語、英語、地方語）が重要であると指摘していた。また高学年でも毎週2時間を越えてまで英語科目を増やす必要はないというのが、都市部の校長先生たちの認識であった。一方で、授業評価のあり方や今後の課題は、各地域及び各学校において大きく異なっていた。都市部（地方都市の中心部を含む）では、授業評価だけでなく筆記試験による評価の導入には概ね賛成であったが、離島をはじめとする地域では英語授業がますます児童の負担になり新たな学力差を生み出す可能性を危惧していた。また教師配置に関して、都市部においては専任の英語教師が教えている場合が多く見られたのに対して、地方都市あるいは離島においては代理教師が多いという特徴があった。

現在議論が継続中である日本の小学校英語教育の導入を考える上からも、先行する台湾の小学校英語の状況を把握することは大切であると考えられる。台湾における英語授業カリキュラムや教材を参考にしつつ、児童の発達状況に見合った小学校英語のあり方が求められている。

参考文献

教育部（2003）：『國民中小學九年一貫課程與教學網站—語文領

- 域』retrieved February 10, 2006 from http://www.edu.tw/EDU_WEB/Web/EJE/index.htm
- 教育部（2004）：『九年一貫課程英語綱要領・學習內容・語文（英語內文）』retrieved March 15, 2006, from http://teach.eje.edu.tw/9CC/fields/2003/language_05-source.php
- 台北縣政府教育局（2003）：『台北縣九十一學年度國民小學英語基本能力檢測實施報告』
- 台北市政府教育局（2005）：『台北市國民小學各年級英語學習能力指標』
- 陳映秀，許月貴（2005）：“Elementary and junior high school English teachers’ perceptions and implication of remedial instruction for underachievers.” 九年一貫課程英語教學挑戰與對策研討會（pp. 1-23.）台北：台灣師範大學英語學系。
- Chang, V. (2005)：“Primary English education in Taiwan: The status quo and the results of a recent survey”. Paper presented at the 18th conference of the Japanese Association for Asian Englishes, Kyoto.
- 張湘君（2001）：「小人兒學英語國小英語教師不足各縣市需求多福」台北：民生報。
- 文部科學省（1998）：『中學校學習指導要領』東京：国立印刷局
- 文部科學省（2005）：「台湾における小学校英語教育の現状と課題」中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会（第9回）。Retrieved March 12, 2006 from www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/05120501/s004_3.pdf
- バトラ後藤裕子（2005）：『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言』東京：三省堂。
- 聶澎齡（2005）：「台湾國小學童家庭社會背景影響其英語能力表現之因素分析」『英語教學挑戰與對策』張武昌（主編）233-278頁。國立台北師範大學出版。
- 蘇復興（2003）：「英語教育的基礎建設」『英語教學』28(2). 1-17頁。
- Oladejo, J. A. (2005)：“Language education policy in Taiwan: The perception of English teachers”. International Conference and workshop on TEFL and Applied Linguistics. pp. 306-319. Crane publishing.

謝辞

国立台北教育大学翁麗芳教授の計らいで台北市内の主要な小学校の英語教育授業を観察できたことに感謝申し上げます。また国立台東大学梁忠銘教授の計らいで台東市内及び離島の小学校の英語授業を観察できたことに感謝いたします。

付記

本研究は財団法人交流協会日台交流センター「2005年度研究者交流事業」の研究助成による成果の一部である。

（平成18年9月19日受理）